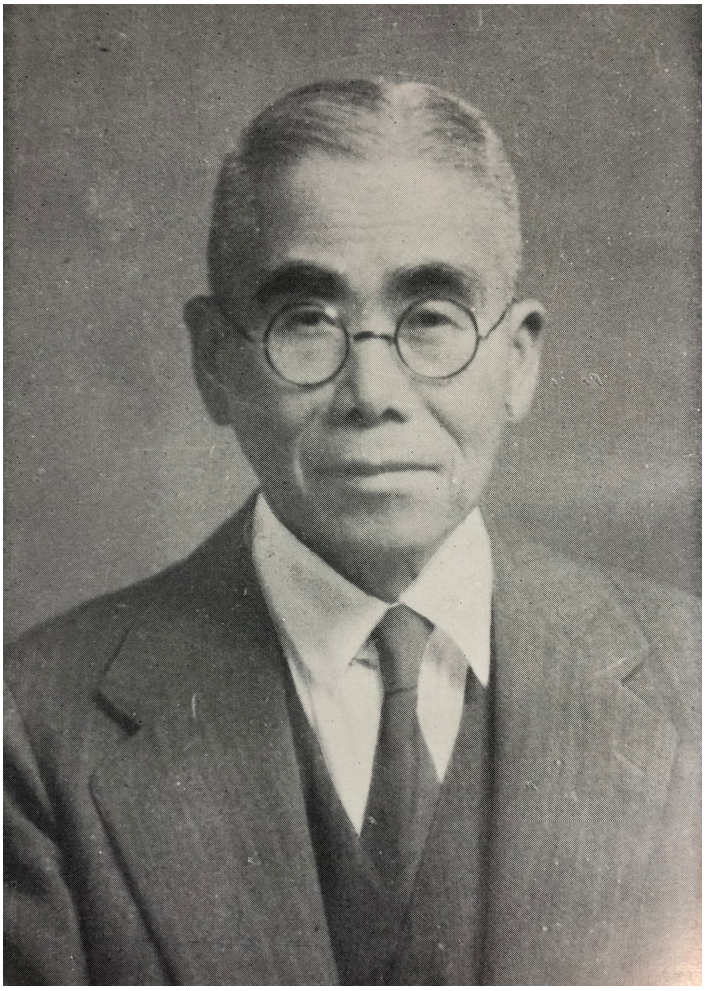
外交官・船津辰一郎と長崎

世界と日本を結ぶ町・長崎。江戸時代はもちろん、開港後も、豊かな国際性を保ち続けた町です。世界を知りたいと思う多くの若者が、長崎で学び、そして世界へと旅立っていきました。

今回は、そんな長崎を窓口として世界に飛び出した偉人たちの中から、日中友好にその生涯を捧げた外交官・船津辰一郎の事跡と、その最新の研究成果をご紹介したいと思います。

1．船津辰一郎とは?



「晩年の船津辰一郎翁」 在華日本紡績同業会編『船津辰一郎』(東邦研究会、1958 年)所収

(1)辰一郎の生い立ち

船津辰一郎は 1873 年、佐賀県(今の白石町)に生れました。幼少のころより漢学が得意で、海外での活動を望みましたが父親の反対にあい、郷里の代用教員となります。

しかし 16 歳の時、その思いがついにあふれてしまい、出奔します。世界を目指す辰一郎が最初に向かったのは長崎でした。このころはまだ鉄道がなく、徒歩で二日かけて向かったと伝わります。

それからしばらく、代書屋や廻船問屋で働きますが、故郷の恩師の紹介状で評定官・竹野敏行の書生となり、更に竹野の紹介で大鳥圭介の書生となりました。そして大鳥の北京赴任に伴い、辰一郎はついに外国の地を踏むことになります。以後、辰一郎は長い中国生活の中で、港町である長崎に何度も訪れることになります。

ちなみに、辰一郎はこのころから日記を書き始めます。日中関係史を知る上で極めて重要な史料ですが、今日に至るまで行方不明です(このあと詳述します)。

(2)外交官・船津辰一郎

さて、辰一郎のような若手の主たる業務は、実地調査でした。中国語が堪能な辰一郎は、長江沿岸や漢口、満洲など、日清日露戦争後に日本が獲得した「勢力圏」内の経済状況の調査で活躍します。日本の対中経済進出の最前線で用いられていたわけです。

1906 年、33 歳で南京初代領事代理となります。船津は外務省留学生試験合格者ではありましたが、外交官試験を受けていません。誤解を恐れずたとえるならば、「ノンキャリ」です。これは異例の抜擢と言えます。

同年、小倉花枝と結婚します。夫婦仲はとてもよく、出産のため花枝が帰省している時の日記には「さみしくてごはんの味がしない」と記されていたそうです。

辰一郎の外交手法の特長は、中国側の要人(孫文、張作霖、張勲など)とのパイプの形成を重視するというものです。この手法は、特に反日感情が高まる地で、それを平和的に鎮静化させるのに大いに役立ちました。

その手腕を買われ、1925 年、52 歳で日本紡績連合会の顧問にスカウトされ、官を辞しました。このころは対華 21 ヶ条要求等で日中関係が最悪の状況にあり、中国の日本紡績企業は反日運動の標的とされていました。辰一郎は、在華日本紡績業を反日運動から守る最前線に立つことを望まれたのです。彼は見事この期待に応え、1927 年の反共クーデタ、1929 年の山東ボイコット、1932 年の上海ボイコットなどから紡績企業を守ることに成功しました。

(3)「船津和平工作」

1937 年 7 月、盧溝橋事件が発生し、日中開戦がほぼ確定します。これに対して昭和天皇は、なんとか戦争を回避するべく、近衛文麿に対中和平工作を指示しました。近衛は、現地で交渉を担当する者として、中国人社会から絶大な信頼を得ていた辰一郎を選びました。こうして辰一郎が行ったのが、世に言う「船津和平工作」です。残念ながら、この工作は第二次上海事変により開戦に至り、失敗に終わりました。

辰一郎はその後も、イギリス人マーシャル提案の和平工作や松岡洋祐による重慶政権との和平工作の現場で奔走します。しかし、ご存知の通り戦争はとまらず、1945 年、終戦を迎えることになりました。

戦後の引揚げでも辰一郎は精力的に活動しました。余りに派手で動いたためでしょうか、一度中国の警察に逮捕されてしまいますが、同国政府は「船津がそんなことをするはずはない!」と警察を叱りとばし、釈放させたと伝わります。

そして 1947 年、辰一郎は 68 歳で、中国に進出した日本資本と現地の平和な関係の構築・維持に捧げた生涯を閉じました。

辰一郎は徹底して「草の根」的な外交で政府間関係の改善を目指した人物であったと言えます。しかし、辰一郎の行動では戦争に向かう両国政府の姿勢をとめることはできませんでした。戦前における民間外交の限界とも言えます。

しかし、このような活動は、現代ならばもっと効果的に行えるのではないでしょうか?高度情報化社会の到来により、「国民の意思」や「世論」の力は強まっています。私たちの力で、世界を変えることができる時代が近づいています。この点にこそ、筆者は、民間の力で日中間の平和に尽力した男・船津辰一郎について学び直す意義があると考えます。

2．船津辰一郎研究の現状

ところが、船津辰一郎についてはまだ十分に研究がなされていません。その大きな原因の一つが、辰一郎自身の手による日記が見つからないことです。

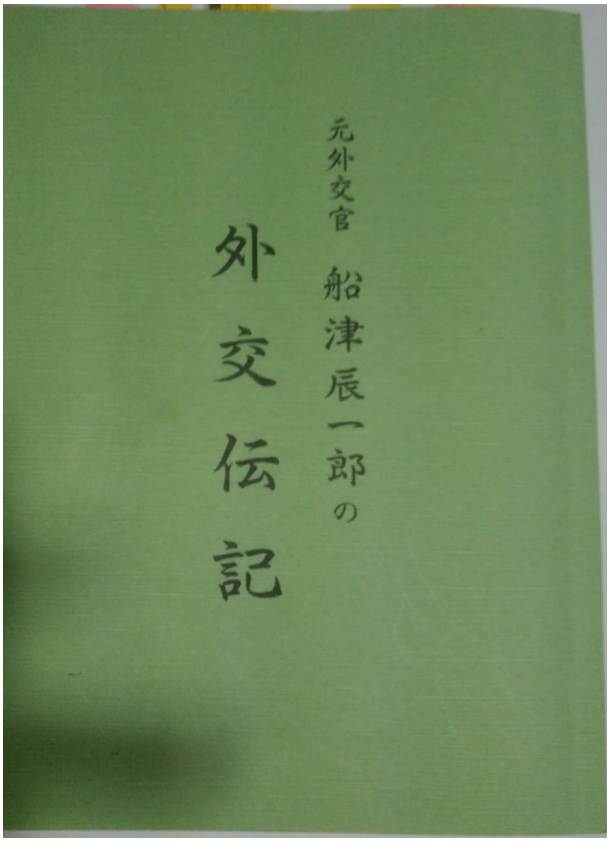
辰一郎については、戦前の日本資本の対中進出を専門とする日本学術振興会特別研究員・渡辺千尋氏が調査を進めています。

渡辺氏によれば、辰一郎についての代表的な文献は、在華日本紡績同業会編『船津辰一郎』(ゆまに書房版、2002 年)です。以降、便宜上「伝記」と呼びます。この「伝記」の中

で、度々引用されているのが辰一郎の日記です。辰一郎の日記は間違いなくこの世に存在したのです。しかし残念なことに、「伝記」を編纂した在華日本紡績同業会は解散してしまっており、日記は伝記の出版社や各種資料館では見つからなかったそうです。

そこで渡辺氏は辰一郎の血縁の方にお会いできないかと考え、辰一郎の生まれ故郷の佐賀県白石町に問い合わせました。すると、私家版で辰一郎の伝記を出版している方がいることが分かったのです。

その方は船津昭二氏と言い、私家版の伝記を『元外交官――船津辰一郎の外交伝記』と言います。以降、便宜上「私家版伝記」と呼びます。船津昭二氏は、残念なことにすでに鬼籍に入られておりましたが、ご遺族の方は長崎県内にお住まいでした。そこで長崎県で学芸員を務める筆者が合流し、渡辺氏とともに北九州市立大学・鄧紅教授の研究室で。ご遺族の方のお目にかかり、「私家版伝記」を拝読する機会に恵まれました。



船津昭二『元外交官――船津辰一郎の外交伝記』(私家版、2014 年)

「私家版伝記」は「伝記」をもとにしたものでしたが、辰一郎の親族である昭二氏の視

点から新たに調査を加えて内容を大きく広げたものであり、辰一郎の事績について新たな知識を得ることができるものでした。そして「私家版伝記」も「伝記」の引用する船津辰一郎の日記を多く利用して書かれており、依然として見つからないままの「日記」の重要性を我々に強く認識させるものだったのです。

また他のご親族とご連絡を取ることができれば、辰一郎の私的な文書の所在についてもお伺いしてみたいと思います。

かくして、昭二氏のご遺族のご協力を得ながら、渡辺氏と私は二つの史料を探すことになりました。一つは、辰一郎が書いた日記です。もう一つは、辰一郎が所蔵していたかもしれない、辰一郎自身が受け取った関係者からの手紙などの関係文書です。これらが発見されれば、辰一郎の過去だけでなく、ことによっては日中開戦直前の民間外交の実態をこれまでよりもずっと詳しく説明できるようになるでしょう。

長崎で学び、長崎から念願の世界へと旅立った船津辰一郎。その人生の秘蹟を明らかにする手がかりもまた、長崎にあるのかも知れません。

【長崎県文化振興課　佐野実】

参考文献

在華日本紡績同業会編『船津辰一郎』(東邦研究会、1958 年)

船津昭二『元外交官――船津辰一郎の外交伝記』(私家版、2014 年)

JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B16080741400、南京漢口状況報告書(船津書記生)明治 32 年、(外務省外交史料館)

JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B16080801300、(6)参考「満洲視察雑件」(外務省外交史料館)

船津辰一郎「南京・鎮江・蕪湖貿易概況(明治四十四年度)」